
E n d R o l l とコンティニュー

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End_R011とコンティニュー

【著者名】

タナカ

【ノーテ】

N4559N

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというキャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きてるときに大きな間違いか罪を犯したようです。一いちばん身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだから罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

氣付いたら草原にいました（前書き）

転生モノを書きたくて始めました！ 特にチートな能力を初めからもつてゐるわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました

俺、白雪燕斗しらゆきえんとは、死んで、何故か美しい大草原に囲まれた花畠に来ていました。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数える。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだつけ？いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやつてこの夢から覚めることが、だ。はい夢！はいこれ夢！むしろ夢じやなきや困る。歩いてバスが突っ込んで爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚める。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくつと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？なんで俺声かけられてんの？はは、まさかこれ神様ついていやつ？ははは、まっさかー？

おわるおわる振り返る。そこには軽そうなホスト風の男。シリバーアクセサリーを首やら手にじゅうじゅう巻いている。全体的にキャラ男にしか見えない。

よかつた、お約束みたいな展開じやなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言つてんですかんなわけないですよ。こんな俺の夢に過ぎないんですから。そうそう、夢じゃなきゃいけないんですから」

「現実逃避も甚だしいよー？ はつきりと事故の瞬間覚えてるんだから諦めな？ 人生諦めが肝心って言つじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりやいいんだあああつ…………」

「まあドンマーリ」

「うひぜえええええええつ…………」

きらり、と白い歯を見せてくれる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かつた。

「美少女の神様は今別件で仕事中なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ……、あれ？ なんで今考えてる」とわかつたんですか？」

「そりゃあ神様だもの」

「……だからこれはゆ」

「夢じやないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思つてる？」

シビアなことを言されました。笑顔で、俺にとつて全力的に絶望的なことを言されました。

「……本当に？」

「本当に？」

「まじで？」

「まじで」

「……現実」

「まあ現実だね」

「……俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく」

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白昼夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買いた物をしようとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかというと、理由は簡単。母親がいないためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残つたのは自分だけ。初めは姉がやつていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているので、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をして

いて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れしていく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かつて突つ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかつた。テレビのスイッチを切るよつに、俺の意識は途切れた。

回想終了。

「……」
「どう?」
「現実か」
「うん」
「……今日の夕食どうじよ?..」
「混乱してゐね」

親父達は飯どうするんだろう。姉貴が家事できるから大丈夫だらうけど材料あつたつけ? 確か米はあつたからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういうば牛乳がなかつた。姉貴は朝いつも飲むから買ってないと殴られるんだよな、失敗した。豚肉とほうれん草はあつたと思うから、豚肉のほうれん草和えが出来るかもしれない。卵も確かあつたはずだ。なんとかそれで満足は出来てほしい。

「…そもそも君もつ死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの? …俺としては早く説明に移りたいんだけどなー…、

これからのこととか

「これからって…、俺に『これから』はないでしょ？」「そういうわけでもないんだよねー…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？困った顔をしている自称神。どういうことだ？と俺が問うよつにじつと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかつたんだ」

どうしてだかわかる？と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろうね、と神は眉をハの字にして笑つた。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それは生きていくうちに償われていくものなのだけど…、君は途中で死んでしまつた」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。待つて、待つてくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言つ。俺はいたつてクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなければ学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつちつち、そういうわけでもないんだよねー…。大罪こそが人の性。^{さが}持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかつたの

に、なんの因果か命を落としてしまった。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじゃん。悪いことした覚えもないのに…、どういふことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのや」

「……は？」

間抜けな声一回目。

一瞬耳を疑つた。何言つてんだこの人。転生つて…転じて生まれる？ はい？ ホワツツ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまったからね、違う世界で新たに生きていくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしからないことがあつたら教えにいける。なんてつたつて俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんすけど。ちょっと待て…、転生つて…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふつ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さつきも言つたように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きていらつちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまった…」

「あ、待てよ…？ もし、俺にそんな間違い？とかがあつたとして、こつやつて転生する必要があるんだ？ そこまでして、償つ？…なんで？ 僕、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「そうさ、どうにもならないような悪人の魂ならば輪廻することさ

え出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある

そこまで真面目な顔で言つてから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑つて俺を見た。しゃらしゃらとシルバー的なアクセサリーが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいさ。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出される」と。新たな人生をエンジョイしようか！ みたいな感じでさ？」「…かつるいな…」

「重くても困るっしょ？ まあ転生先なんだけね…、ねえ君、ファンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「…は？ そりゃあ冒険者とかモンスターとか…」「うん、つまりそこに行くの」

「……………は？」

「さつてねー…それと…」

「待て。おい待て。すごく待て。はい？ どうにつけど？ 今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」「は…はい！？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにならんと読み書き完備だよ？ まあゆっくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！ え、俺そんなファンタジーなとこ行くの決定？ まじで？」

「まじでー」

「かつるー？ 僕のこれから先の人生すげーかつるい調子で言われたー？」

「いや、じつじつのはノリで突っ走っちゃった方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええっ！？」

こいつ恐らくすげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがつた！？本当に神様かこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…？」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思つたら大間違
いだからね？」

「どちくしょうが！！」

「そうだよな！ そんなご都合設定あつたら苦労しないか！ 無理で
すよね！」

「君の目的は自分の中に氣付くことだからね…、もし氣付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか
…なんだよそれ」

「そもそも世界と言うのは別次元のよつなものだからね。早い話三
次元と二次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が一次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もつ説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違う世界で生き
ていこうと逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかむ、君もともとスペック割と高くない？ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強くて、勉強はそこまで出来るわけじゃがないけど頭の回転は速いし。本当にア充爆発しろとか思われるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか

…」

「…」

「…そういうわけでもない？俺は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？そもそも世界 자체が違うんだよ？星が違うとかそんなじやなく、そもそも次元が違つ。つまりさ、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だつてまつたく違う。魔法だつて飛び交うし、剣も交じり合つ。そうぞ、類にとっての異世界なのだからね」

「…世界が、」

「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だつてわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だつてある」

「…」

「…どうしたの？せつきからおとなしいけど」

「…なんかいろいろ言つてるけど、結局のところ…、無事は保障できない、だろ？」

「…」

「…どうしようがあああああああ…」

自称神が言つには、言語能力と魔力核だけはあちらと同一のものとする、らしかつた。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方

はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということでの魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしないし、普通の人と同じようになるかもしない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知らねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾にをつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけだ。

「まあ、そりそろお話も終了かな？　さて、君を違う世界へと転生させれるよ。…あ、面倒くさいから」のままでいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そつそつ転生していく人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

田 覚めたらやはり異世界

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなつてていく。あれ？ なにこれ？ と思うが、それは声が小さくなつていつてるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと気が付いた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶつん、とリモコンでテレビの電源が切れたように、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、親父も姉も酷く泣いていた。そのときに俺は思ったのだ。『この人たちを守ろう』、と。
：守れてねえじやん。俺死んじやつたじやん。そ、それはいいとして！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するよになつた。勉強の方面はあまり向かないし、姉の分野（弁護士を目指してた）だったので、体力をつけて家のことをして、将来は働きに出ようと思つっていた。

親父は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組んでいて、たまに倒れることもあつた。けれどそのたびに体が強化されていつるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたらしい。どこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、何度か迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性でのフラグメーカーだ。まあ、親父は母親一筋だつたらしいけど…、つて話逸れた。

つまりそんな親父の様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。親父みたく、家族を守れるように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやつた。…最近はむしろ楽しくて料理権は全部頂いてるけど…。ついでに親父を見習つて、少なくとも変な輩からは大事な人を守れるように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れただけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入つていた。ここだつたら運動も出来るし、走ることだけしてればいいしそこまでお金もかからないと思つたからだ。…実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなくて走つてただけなのになぜだ！？ ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言つていた高スペックといつのは、全て家族のために頑張つたものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありますか？ 今頃親父と姉はどうしてるだろうか、と考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いていつてしまつたし、もう守れない。そう思つたびに泣きそうになつた。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなんだ。親父、姉ちゃん、死んじやつてごめん。

自称神が言つていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だつてそうだろ？ こなんいつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、親父達の元へと生まれることは出来ないと思つけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあつたのだ。

死んだ母親のぬくもり。親父達の笑顔。友人達との騒ぎ声。今考えると、それはとても大事なものだつたのだ。早く、早く帰り

たい。

帰りたいんだ、俺は。

「...ん?」

目を開けたらそこは、先ほどまでいた草原ではなくて、ましてや見慣れた天井でもない。

木々に囲まれた雲一つない青空。太陽の日差しが葉と葉の間に入り込み、緩やかな木漏れ日となり、俺を照らしていた。

ざわざわと、普段は聞きなれない森のざざめき。空気も澄んでいて、息を吸うたび清純な何かが体を通り過ぎていくようだつた。

ビバ・異世界。

はいはい俺落ち着け、さつき説明を散々聞かされただろ？ 落ち着け落ち着け落ち着け。息を吸え、吐け、大きく深呼吸だ。ここは空気が綺麗だからな、吸つて、吐いて、吸つて…、ほら、気分が落ち着いてきただろ？ 大丈夫だ白雪燕斗。俺は出来る子だ。ほら、状況確認？ 頑張れ俺、すごく頑張…、

! ! ! ! !

……俺は悪くない。俺は悪くありません。普通の感覚ならこうなつてもおかしくないはず。

「まじか、まじで異世界か？ 夢でもなくて？ やっぱり現実…？」

試しに頬を抓つてみた。痛かつた。現実であり夢じゃない。自称神に言われてたことだつたが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。見知らぬ世界に、頼れる人もいない中で一人ぼっち。

まじでか。

うわあああ…と頭を抱えて、大きく息を吐く。そのときこ、ふと、もぞり、と動くものがあることに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

…え、モンスター？

一気に血の気が引く。確かモンスターもいる、と言つていた。でも、いきなり？ 俺倒せると思えないんだけど？

ぎざぎざ…と油の差してないロボットのように振り替えると、そこには白い着物のようなもの見えた。

「は…？ 人…？」

氣を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで…、狩衣、と言えばいいのか？ つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。

その瞬間、自称神の言つていた言葉を思い出した。

転生してくる人は、もう一人、いる……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、というか横跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、下のほうで縛られていた。

「日本人、なのか？　この衣装は和風っぽいんだけど……。」

そう考へてみると、その狩衣を纏つた人間の瞳が、開いた。

「ほんにちは」

「…………？」状況を掴めていない。

「あ、おはようございますなのか？」こうこう場合は

「…………」考へ中。

「お前もあの自称神に会った？　あのキャラそういうの

「…………？」混乱中。

「ところどころ異世界なのかな……、見たところお前も転生してきた人間だよな？」

「…………」思い当たる節を見つけた。

「まさか本当にモンスターとかいたらどうすつか…お前戦える？」

「…………！」思い出した。

「…………？」

「ほんに本当に異世界!!!!？」

「あ、やっぱりお前俺と同じか」　平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こういうときも「いいユカ大事。あれ？違う？まあなんでもいいが、似たような人がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘……本当に来たんだ……。これは、喜ぶべき……？　いや、悲しむべきということ……？」

「おいお前なんていうの？　名前

「え、へ、な、名前？　て、ていうか何でそんな落ち着いてられるの…」

「いやわしき散々驚いたけど…」

そりやあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。見た目ではあまり見分けがつかなかつたがどうやらこいつは男らしい。瞳は俺と同じく黒色だつた。なんだ、普通に日本人っぽい顔立ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？　俺はそんな名前じゃないよ、忌月、それが俺の名

「…日本人じゃない…？　苗字は？」

「苗字？　そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶^{かや}の国、列峰領^{れつぽうりょう}の治める…」

「もういい理解した」

「いらっしゃも違つファンタジーなのか。

田 覚めたらやはり異世界（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

魔女と出会いました

「…それで、これからどうぞ」

忌刃と名乗った男に問いかける。自己紹介を済ませてからじどりやら同じ年だったということがわかった。身長は俺のが高い。そのことに優越感を覚えつつ、これから先のこと話を話し合おうと口を開いた。

「あのキャラ男、本当に放り出してきやがって…」

「ちや、ちやらお？」

「あー…あの自称神。軽そうな男」

「…神様？ 神様は女だったよ？ しかも綺麗な人だった

…なんですか…？」

「ま、まじで！？」

「え、食いついてくんの！？ あ…ああ、なんか『別にあなたのた
めなんかじゃないんだからね…』って言われた」

つ、つつつつつつつつシンドレ…だと…！！！ 俺のところはあの
自称神とかいうキャラ男だったのに！？ 理不尽だ！

…あれ？ でもそういえば、美少女の神は別件で仕事とかなんとか
…。…まさか…。

「お前が！ お前方が！ お前方に行つてたからこっちに来な
かつたのか！ 謝れ！ 全身全靈をかけて謝れ！」
「え、ごめん…、じゃなくてなんでいきなり怒つてんの…？」
「ちくしょう…！ 僕だって美少女の方が良かつたさ…！ あんな

チャラ男に笑顔で君死んだよとか言われて腹立たないとかおかしいだろ！？ だろ！？」

「へ…へえ…よくわからないけど、その、ちや、ちやらお？ が気に入らなかつたわけだ…、つて俺に八つ当たりすんな…」「しなくちゃこの荒ぶる気持ちが抑えきれねえ！！」

「知るか！」

ちくしょう！ 俺も会いたかつたよ美少女！ 調理実験のときに女子より手際よくてしかもいいとこ見せようと飾り切りまでくりだして、最終的に全部自分で作つたら白い眼で見られた俺だよ！

男子に女子より女子力高いんじゃね？ と褒められて、女子には先ほど言つたとおりの目で見られて…、俺のハートは粉々でした。これでも俺だつてモテてみたいと一般的な男子の欲求はあるんだ！

「だいたい、俺はなあ、もつと女子と…」「しつ…」

さらばいろいろ文句を言おうとしたら、いきなり口を塞がれた。はあ！？ と思わずその手をとろつとしたが、どうにも忌月の様子がおかしかつた。

よくよく考えてみると、俺は今叫んでいた。イコールそれは大声だつた。イコールそれは周りに響くというわけで。しかも、この世界は、ファンタジー。言つてみればそりゃあモンスターがいるらしく。

「……っ！」

今更自分の失態に気付く。こんなわけわからない場所で大声出すなんてありえない。馬鹿か俺。背中に冷や汗が流れ、体温が下がつていぐ。

ちくしょう、気付くべきだつた。ここは異世界。ここルールが何

なんてわからないし、わかるはずもない。だって俺はここに転生してきたばかりだから。…言い訳になるな、これ。

がさがせとこちらへ近づいてくる音がする。それは確實にこちらの方へ向かっていた。自然に体が緊張や恐怖により強張った。忌月の方も同様だった、けれど瞳の中に鋭いものを蓄えている。

…あれ？

そのとき俺はどうしようもなく、違和感を感じていた。それは特に説明がつかないが、どうにも、違和感というか、不自然だというか…とにかく曖昧なものだ。

けれどガサガサツという茂みの音に、その思考は途切れる。来るか…？ と身構えたそのとき、

「おや？ そなたら人間か？」

やけに高いモンスターの声だ。…ん、あれ？ 違う？

ぱつと声のした方を見るど、そこには緑色のローブを地面で引きずりながらこちらへ寄つて来るピンク色の髪に紫色の瞳。うん、ファンタジー。ってそうじゃなくて、え？ どういうことなの？

その人はどうにも幼い顔立ち＆身長で、小さい子供のようだ。けれど喋り方がおかしい。子供らしくない。その子供らしくない幼女？ は俺達二人を左右見て、それから顔を赤らめる。

…赤らめる？

「いや…わしがそうこうとに偏見など持たん、邪魔して悪かつたのぉ…」

…ん？

ちょっと待て、俺達の今の体制を確認してみよ。

俺 先ほどまで文句を叫んでいたため若干忌用の方へ乗り出し、顔も随分近い。

忌用 茂みの音に気付いたため、俺の口を塞いでる。

…総合して、考えると……、

「ちひがああああ う…！ 俺はそんなアブノーマルな趣味持つてません！ 違います！ 本当に違います！」

「は、え？ あ、あぶのーまる？ なんだそれ？」

「…なに？ おぬしらはこの森の中で事に及ぼうとしてたわけでは…？」

「そんなことあるか…！ 俺は女の子… 女の子が好きなんです！」

「そう呼ばれても困るのじやが…」

「『めん俺理解できてない。誰か説明して』

そつぱりわかつてない忌用は置いといて、俺は幼女に慌てて近寄る。

「俺達、ここよくわかんなくてさ…道もわからんないし、ここひくんに家つてないか？」

「わからなー…？ …ひひひ… おぬしら、わしことわかつておるか？」

「ん？ なにが？」

「わしこの深海の森の大魔女、ウェイブ・マーガレットじゅざー…」

「…魔女？」

魔女、魔女、魔女…、まさか、あの？

「あ…」

「あ？」

「握手を…」

「……」

あれ？ 僕なに言つてんだ？
なに言つちやつてんだ！？

なに言つちやつてくれぢやつてんだ俺！？

「うわ、わわわわわ、すいません、俺魔女つ娘とか考えてないです
！ 違います！ 萌えとかそんなど違いますからー。」

「違うのか？」

……ん？ なんで残念そうなんですか？

「盛り上がりがつてるとこ悪いんだけど、お嬢さん、出来ればこじれり
か教えてほしいんだけど…」

「お嬢さんではない…。ん？ …なにやらおぬし、ぽっかり抜けた

ような力があるな」

「え、わかります？」

「……なんの話だ？」

話に入ってきた忌用を見たウエイブは、なにやら変なことを囁く。
それをせらつと受け止め、むしろ理解してゐるような口調だ。
訝しげに見ていたのに気が付いたのか、忌用が慌てて俺に教えるよう
に言った。

「俺、死ぬ前は靈媒師だったんだよ」

……なんですか？

魔女と出会いました（後書き）

衝撃の事実なのかなんなのか…。ちなみに魔女様は美少女です。

回じ転生者は靈媒師

「れ、靈媒師？ 精霊師つて…、あの、靈とかなんやら祓いやつ…？」

「ううだけど…君の世界にはないの？ 俺のいたところじゃ、一般的な職業だつたんだけど…」

「そ、そんなサラリーマンみたいな扱い！？」

「あ、さらりいまん？」

そうか、よくよく考えてみれば忌月は日本人というわけでもない。いくら顔立ちが俺の元いた世界に違和感ないものだと思つても、こいつもまた違う世界にいた。俺の常識の中で通じるものも、他ではまったく適応されないので。

それに忌月だつて俺の主にカタカナで使われている言葉に反応していた。年も同じだから、ついまつたくわからない、という顔をしながら言葉を反復されるたびに俺はようやく気づくのだ。ここは日本じやないと。

それにはどうやら言語機能も若干の差異があるらしい。現にウェイブには通じているよつに見えた。『アブノーマル』とか…、いかん、考えるな考えるなおぞましい。おつと話がずれた。

「まあ、そういう『靈力』つてのが俺にはあったんだけど、この世界に来るときにはすっぽり抜けたつてわけ。まあこの世界にある魔力？とはまた違う力だからしじうがないとは思つたんだけどね」

「そういうのがあるのか…」

「まあ別に俺はどうちでもいいんだけどね？」

そういう忌月の顔は後悔も何も無いように見える。いや、むしろ嬉しそうなような…。まあ確かにこの世界にとつて異質なものはない

ほつがいこだわる。皿立てもしょうつかない」

「違う世界、…？ やせつおぬしきの世界のものでなーのか？」

「え」

「え」

「…なんじやその反応は」

いやいや世間話のよつに言われましたよウロイブわざ。俺と月は顔を見合わせる。

「…わかるもんなの？ ルーツの」

「普通の人間にさわからんじゃろ。時間がたてばおぬしきの世界に染まるじやうが、いかにも臭いが違つ」

「こ、臭い？」

「昔にもやうこつものがおつたからのお…、150年くらこ前じやうつか…」

「ひや、ひやベジタブルねん？… 前こいつだよー」

「ん？ 今年で324歳になるの」

「へへつー？」

なんていつたい。300歳越え…だと…？ 確かになんかの物語で魔女は長生きだと聞いたことがあるけど…、こんな幼女が？ まじか？ まじですか？

ちなみに呪豆は、「だからそんなに口調なのかな…」とかなんやう言つている。突つ込みビリがずれてるや。

「まあかなり珍しいことに違いないからな。特にその黒い皿はあまり見かけん」

「やっぱり青とか緑とかオンパレード？」

「お、おんぱりこど…？」

「そりじゃな。まあかといつて珍しい、というだけじゃ。気にせずともよいと思うぞ？…立ち話もなんじゃ、おぬしら、わしの家に

でも来ぬか？この世界のことを教えてやる」

「本当！助かるよ、う、うえいぶさん」

「…本当お前力タ力ナつぽい言葉苦手だよな」

「かたかな…？な、慣れるから！そのうち慣れるから！」

忌用と軽口を言い合いながら歩き始めたウェイブについていく。その間にも少しだけ説明を受けた。

まずはこの世界は魔法が普通に存在する、ということだ。この世界に存在する人間は魔力核、というものを持っていて、それを育てることで魔法の力を上げているらしい。まあ、魔力核と言うのはある自称神に受けた説明どおりだ。

魔力核は人によって千差万別十人十色。つまりそれぞれ違うらしい。似たようなものはあっても同じものはない。人によって成長速度が違つたり、容量が違つたり、属性が違つたり…、ちなみに属性と言るのは、炎、水、風、土、雷、風、闇、光、そのどれにも属さない（筋力強化などの魔法）無ということらしい。合つた属性以外が仕えないわけではなく、国語より数学、音楽より家庭科、のように自分に合つた、ということだ。つまり全属性をこなせる人もいるということもないこともない。

魔法を使うときに必要なものは魔力とイメージだ、とウェイブは言う。初心者には魔術書などというものがあり、そこには詠唱の言葉と共に魔法が載っているらしいが、詠唱は実際どんなものでもいい、一番大切なことは魔力を形にすることだ。そのときに詠唱と言うものは必要で、形のない魔力を整える、まあ例をあげるとするならば粘土をこねて像などを作るようなものらしい。簡単なものならば詠唱は必要ないらしいが、魔法を得意、もしくは魔力が少ない者、魔力をたくさん使う魔法には用いられる。

「…出来そうか？」

俺はとりあえず毎日尋ねてみる。

「んー、俺は死ぬ前は似たようなもんで飯食つてたわけだし…、君のところじゃそういうのなかつたんだろ？ 君こそ大丈夫なの？」

「料理洗濯掃除なら大得意なんだけど…」

「…それは女人がやるものじゃないの？」

「あーそれは女性差別なんだぞ？ 学校で習わなかつたのか！？」

「な、なんていきなり怒るんだよ！」

「うるさいの…、静かにしどらんとモンスターが襲つてくるやもしれんぞ？」

「もんすたあ？ なにそれ？」

「怪物とか妖怪みたいなもんだよ」

やはりカタカナ的な言葉は苦手なようだ。口調は普通なのだけれど、

どうも年が食い違つてるように見える。

なんとなくそう思つてるとウェイブが指差しながらこちらを向いた。

「あそこがわしの家じゃ。それじゃあこの世界のことを説明しようかの」

魔女の家は案外普通

魔女の家、といつて、少々身構えていたのだが、そこはビリにもイメージと違つて小奇麗なものだった。もちろん魔女に付き物？な壺や杖はあつたのだが、壺は中身は入つておらず空だし、杖だって艶やかな羽とか、毒々しい紫の水晶玉まくつついてるわけでもなく普通の木の杖だ。その代わり本が本棚に限りなく詰め込まれていて、それは地面にも積み重ねられる程だつた。けれどきちんと計算されているのか、それは邪魔ならない程度にあるのであって、やはりイメージとは異なる。

なんというか…書斎のよつな。ウェイブが普段使つているらしい机にも同じように本が積み重ねられていて、他にも資料らしき紙が無造作にばら撒かれている。あちらの方が余程汚い。

こちちじや、とウェイブが招くところは客室のようで、これまた普通という形容詞が正しいものだった。いや、日本と比べてはどうしたことなく昔の外国？ヨーロッパ辺りの古い家に似た感じだ。

「座つて待つておれ、紅茶でいいな？」

「ああ」

「こうちや…？ お茶、だよね？」

「なに言つてんだ、座ろうぜ？」

「え、そうやつて座るの？ 置とかはないの？」

…こちらの方もいろいろあるよつだ。俺基準にしてみれば、この世界も大体のこと（例えば家とか服とか）は俺のいた世界と似たよつなものではあるが、忌月にしてみればまた違うらしい。

置と言つたけれど、やはり忌月は昔の日本に似た世界から来たんだろうか…、服装だつてやはり狩衣にそっくりだ。かといって教科書でしか見たことがないんだけれども。

「ここで紅茶が存在しているように忌月がいた世界に置だつて存在していてもおかしくない。俺の耳が翻訳されているだけで、実際の名稱は違うはずだ。これはあの自称神に感謝しなくちゃなるまい。

「そういうえば聞いてなかつたけど、お前どうして死んだの？」

「…え？」

「いやだから、お前も死んで異世界に来たんだろ？　なんで死んだのかなつて」

「……」

「…忌月？」

「たいしたことじやないよ！　え、えんぢ…？　だつけ？そつちはどづしたの？」

「Hンドリってなんだよ俺終了しちゃつてるじやねえか」「

あからさまに俺に話題を移した忌月。よくよく考えれば自分の死んだ経歴なんてあんまり聞かせたくないわな。デリカシーが足りなかつたかもしれない。

「俺はトラックが突つ込んできてそのうえ爆発して死んだ」

「寅が爆発…？　痛そうだねそりや…」

「食い違つてる気がするけど気にしないでおこう」

カタカラナはそのまま伝わつているわけか…、なんか言語能力があつちよりこっちのが高性能…？

『それは俺が有能だからだよ』

…今不愉快な声が聞こえた気がした。気のせいだ。確實に気のせいだ。考えたら負けだ。これだいい。

『向こうの神様がねー、基準を俺と合わせちゃったんだよ。いくら苦手だからってさ。手伝つてつて言つたら手伝つてあげるのに。素直じゃないよね?』

『な、なに勝手なこと言つてんのよ! ベ、別に真似したわけじゃないんだから! あ、あんたの方が、仮に性能が良かつたとしても、その、違くて…で、出来なかつたわけじゃなかつたんだからあ!』

『うんわかってるよお、だからほら、泣かないで』

『な、泣いてないわよ! カ、勘違いしないでよね!』

「リア充黙れ!」

「え、えんどどびうしたの? いきなり叫んで…」

「いや、今お前の言語能力がかなり残念な状況にあるのはあっちの責任だつたみたいだ。だからお前も叫べばいい、『リア充爆発しろ』と…」

「いや意味わからないんだけど」

「あともう一度言つておぐが俺はエンドじやねえ。終了してねえか

『』

「紅茶を入れてきたぞー、キゲツ、エンド」

「ああああお前が言つてるから結局エンドになつちやつてるじやねえか!…」

人生終了して名前も終了つてか! 不吉じやねえかこの野郎!

「いちいち騒がしいのう…、まあ飲みながらでも聞けい、ほひ

「…サンキュー」

「…この取つ手持ち上げるのか…」

「お前だけ毎回ずれてるな」

ウェイブが自分の紅茶を一口飲んでから、ふう、と小さく息を吐き、俺達に向き直る。

「まずはこの世界はアストウリアスと言つたがじや。それでここは深海の森。」の近くにはイベリアという大きな街がある。そこでおぬしらばギルドに登録するがよい

「あらんど…？」

「あー、俺わかるから、説明するから会話だけ覚えて後で俺に聞け」「わかるのか…？」まあそれはいいとして、そこで登録して『冒険者』となるのがおぬしらには一番良いと思うのじや。これは国と国とを行き来することにも使えるし、まあ身分証明書じやな。これが大きく役に立つ。まあギルドとしては仕事を受けるというのが一般的じや。簡単なものからそりやあ難しいものまで山ほどある。そのどつちともに料金はもらえるから。生活には持つて来いじや」「仕事って、どんなのがあるんだ？」

「なに、モンスター退治やら、秘宝を求めてダンジョン攻略するためのパーティ集めやら、引越しの手伝いやら、そうじや、料理人募集のようなものもあるのう」「料理！　まじか！」

「そ、そんなキラキラした田で食いつくといつかの…？」

料理なら持つて来いだ！　試行錯誤を繰り返し作り上げた究極の味噌汁からフグの調理（こつそり獣師さんにもらつた本体丸々）を完璧に行い、さらには和食洋食中華なんでもこなした。

全てのバイト先でも何度も就職に来てくれと言われたし、それどころかプロの人さえ感激させた。俺ははつきり言える。料理の腕だけはチート級だ。…まあ努力も異常にしたけれど。

「…おぬし見てみたら器用さが異常な数値じや。魔力量もそれなりが望めるし…、おぬし案外いい線いくかもしれんのう」「え、そういうのわかるのか？」

「わしは魔女じやぞ？　そのくらい造作もないわ」

「へえ、俺は？」

「ぬしのはなんと詰うか… もともと呑つた『なにか』のせいか魔力の質が特異じやな。それにぽつかり空いた穴が大きい分、量だけはかなりのものを望めるぞ？」

…なのに貧弱じや。限りなく体力がないえ力もない。走つただけで息が切れるレベルとは…、男としてそれはどうかのう」

「……」

「おい、今こいつに多分クリティカルに精神的ダメージを負わせたぞ？ 人の気にしてるところ突いちゃった感じじやなく抉つちやつた感じだぞこれ」

「まあ話続けるぞ」

「あ、スルーしたこいつ」

どんよりした精彩を欠いた目で、暗雲を周りに漂わせてる忌月さん。そこまで気にしていたことなのか。

「それでこの世界の大体の事情なのだが、数年前から戦争が始まつておる」

「え、そんなヘビーな状態？」

「まあ今は休戦しておるが、どうなるかはわからん。… それに戦争が始まるより、また数年前から魔物の数が増加してきてある。総合すると、まあぶつちやけ あんま平和じやない的な？ … ということじや」

「…ノリが軽いぞ？」

「軽くせねばやつておられん。まつたく人間というものはどうじようもないものじや。今も魔物は増えてきておるといつのに、同じ種族同士で争いおつてのう…、いや、今は亞人やら獸人やらしきぢやか」

「…ちなみに数年前つてのは、どのくらいだ？」

「ん… 戦争が始まったのは百年ほど前、魔物は増え始めたのは百五

十年ほど前じやの「

「数年じゃねえ…」

「戦争なんて下らん」としとる暇があつたら魔物の討伐隊でも組め

ばいいと思ひのじや、なのになぜそれをせぬのかのう…」

「セリヤあ当人達にとづけやくだらないもんじやないからなんだろ
うよ。それぞれが違う正義や信念持つて生きてんだ。それをみんな
が掲げるから争いになるんだよ。結局誰も間違つてないからわ」

そんなことをなんともなしに語つたら隣に座つてゐるこいつの間にか
生氣を取り戻した彌月が目をぱぱぱち、と瞬かせて俺を見た。

「…君と同じことを言つた人がいたんだ」

「くえ、それは素晴らしいケメンなんだろ?」

「いけめん? …麵?」

やっぱこいつの言動面白くなつてきた。

魔女の家は案外普通（後書き）

地名やらなんやらほんとクラシック曲から使わせてもらったりしています。

アストゥリアス

アストゥリアス（伝説曲）（西語：Asturias（*Leyenda*））は、イサーク・アルベニスのピアノ曲の一つ。元来は、『旅の想い出』作品7-1の第1曲、前奏曲「伝説」（西語：*Leyenda*）として書かれた曲である。

イベリア

イベリア、12の新しい印象（フランス語：12 nouvelles Impressions ? en quatorze cahiers）は、イサーク・アルベニス最後年のピアノ曲。

Wikpediaより。

修行しました

それから、ウエイブからたくさんこの世界の常識を知った。

まずは暦。春の月、夏の月、秋の月、冬の月の四つがあり、一月は90日ある。春の月1日、と数えるらしい。地球では12ヶ月で一年だったから、それを聞いて思わず眉を顰めたが、一月が90日だということは30日分が三つ……、ということを考えればまあいいともう。合計で360日だし、そう思えば割と近い。

それからモンスター。予想通りゴブリンとかオークとか有名どころがうじやうじやといふ。俺の聞いたことのないモンスターの名前もあつたがそれもやはり異世界。異世界だとしても世界は世界なのだ。知らないことがあつたって仕方がない。

「おぬしらがよければいいんじゃが、しばらくここで修行せんかの？」

「へ、どうしたいきなり」

「いや、まだこの世界に来たてであまり力の使い勝手がわからぬじやろ？ 都合のいいことにおぬしらにはおぬしらなりの知識が豊富にあるようじやし、案外強い魔術師になれるやもしれん」

「え、俺ら、魔法なんて使つたことないんだぞ？ なのに大丈夫なのか？」

「それに強い人つて小さい頃から鍛えてるもんじゃ……」

「いいや、そんのは考え方一つ、戦い方一つでどうとでもなるわ。魔力が少ない人なら少ない人鳴りの戦い方があるように、誰しも得意不得意があるように、確かに経験がないのは厳しいが、おぬしらにはおぬしらのことは一風変わった考え方、想像力があるじゃろ

う？ それにわしが鍛えてやると黙つておるんじや。 いたずらに大魔女と呼ばれておるわけじやない

「…まあ俺にとっちゃ願つてもない誘いだけど…、いいのか？」

「構わん。近頃は退屈しておったしの。それにおぬしらは…面白そうじや」

「？ どういう意味だよ

「そういう意味じや。よし、まずはだいたいのモンスターの知識を詰め込まんとの…」

「え、俺勉強嫌い」

「俺も？」

「おぬしは体力づくりじや。せめて一般人には追いつけ。おぬしは記憶力がよさそうじやから本さえ渡しつければいいじやる。魔物払いの結界をしておくからまずは十周ほど走つてこい」

「……俺に死ねと？」

「どんだけ体力無いんだよお前」

つまりそんなこんなで、大魔女さん、ウェイプとの修行が始まった。先ほど台詞の中に登場したが、俺は勉強が嫌いだ。自称神には頭の回転が速いなどと褒められたが、勉強は本当に苦手だった。成績は下から数えた方が断然速い。情けないことだけれど、つまり、そういうことだ。…馬鹿なんです。すいません。

一方の忌月は、確かにウェイプの言つた通り本を貰い、ただ読んでいるだけで簡単に覚えていた。だけど体力がおかしい。なんで十メートル走つただけで息切れするほど疲れるんだ。そのうえ顔も青くなるし今にも倒れそうだし、正直にここまでとは思わなかつた。

十日間はお互に苦手分野のことに徹し、ひたすら努力をした。さすがに俺だってサボつていられないことはわかっている。下手したら死ぬのだ。そういう危険が常に纏わりついている。

ギルドに登録せずに働くことはダメなのか、と聞いたことがある。

身分証明書はすっぱり諦めて。そうしたらい、『どこから来たものか
さっぱりわからぬ奴をそつそつ雇えると思つか?』などと返された。
確かに俺達にはもう家族いない。いや、生きているのだけれどこの
世界には存在していないのだ。それに今頼れるのはウェイブただ一
人。だけれどこの魔女が住んでいるのは森の奥深く。しかもなにや
ら『恐れられた存在』らしい。なんだか魔女らしい噂だ。
つまり後ろ盾と言つものが存在しない。いきなりぱつと現れたこん
な怪しい奴を雇つてくれるのは相当人の良い人間らしい。じゃあそ
ういう人を探せば、と言つと、『そんなにおぬしは頼れるか?』
と。無理かも。まあギルドには登録するつもりだったし、一応聞
いてみただけなのだけれども。

十日たつころには、忌月が一般人並みの体力になっていた。それに
俺はすぐ驚いたが、ウェイブがあつさり答える。

「自力じゃもうほぼ無理だつたから、魔法でぎりぎりまでそういう
筋肉などをあげて、それからトレーニングさせたのじゃがそれであ
れがもう今出来る全てじやつた」

…通りで落ち込んでるんですね忌月さん。隅で体育座りをしており、
背中には暗雲を背負つてゐる。なんとか忌月を立ち直らせてウェイ
ブから今度は『魔法』について学ぶ。

魔法というのは、前にウェイブが言つたとおりそのまま、イメージ
して鍊つた魔力を詠唱で形作る、という感じだ。本に記されている
ようなものがたくさんあり、オリジナルで創作できたり、魔法と言
うものは無限の可能性を持つてゐる、という話だった。

まあだが、オリジナルで魔法を作るというのは難しく、確固たるイ
メージを持ったうえに魔力も大量に消費するらしい。まあ初めて使
うものだからそういうものだよな。

「…魔法といふものは感情に連動したりする。これは気をつけなければいけない」とじや

ウェイブが真剣な顔立ちで囁く。

「例えば怒りで我を忘れるときがあるじやろ？　あれは酷く危険な状態なんじや。そんな感情から魔力のバランスが崩れ、増幅する。それが放たれれば、相手どころか自分も傷つく。十分用心するんじやぞ？　…まあ人の心はそう無理矢理制御できるもんじやない。じやが、ちゃんとそれは覚えておれ」

それからまた数十日がたつた。

ウェイブの元で身を守れるだけの力と魔力を蓄えた。魔力はどうやら自然に体力が回復すると共に溜まっていくらしい。うまいものを食べても補給される。そんな簡単なものなのか…と半ば呆れたりもしたが。

魔法も使えるようになった。俺はどうやら異常に器用らしく、案外簡単に出来たので俺自身が驚いた。ちなみに忌月は、元いた世界で使っていた力どこか似ているらしく、一いつ切くも簡単に出来た。：そんなんでいいのか？

忌月は魔力？の際に使っていた術を試そうと一人でいろいろやつていた。それを見て俺自身もオリジナルのやつ作ってみよーかな、などと考え、別々に修行していた。

なんとなく、俺は焦つてたのかもしれない。元の世界でまた生まれるため、俺の、『間違い』か『罪』を探す。力をつけた後に、何かがあるんじゃないかと。

そして、俺達は今日、魔女、ウェイブの家から出る。

別れと出合い

「本当に大丈夫か？」
「大丈夫だよ、心配すんな」
「…いつでも来てもいいからな？」
「ありがとう、困つたらまたここに帰つてくるよ」

俺は帰る、といつ言葉に変えてウェイブに告げる。すると、寂しそうなウェイブの顔が少しだけ緩んだ。

今日までの間世話に会つて、最初に出会つたこの世界の人間がウェイブでよかつたと心から思つてゐる。多分忌用も同じ気持ちだらう。こちらも眉を八の字に下げて、少し寂しそうだつた。

「ウェイブさん、本当にありがとうございました」

それでこの忌用、少しの単語なら発音できるようになつていて。どうやら言葉関連は記憶力がいいはずなのに苦手らしく、覚えるのにこづつた。ウェイブの名前はちゃんと言えるようになつてたが、いつの間にか忌用は俺のことを『エンド』と呼ぶようになつていた。いや俺まだ終わつてねえし。一回終わつたけど転生したし。いくら言つても直らないのでもう諦めたのだけど。

「それじゃあ行くな。本当にありがとう、ウェイブ。今度お土産もつて帰つてくるからな」
「絶対じゃぞ？ 絶対じゃからなー。」
「はーい」
「じゃあ、行つてしまーす！」

俺と忌月は歩き出す。時折振り返りながら進むけれど、ウエイブはずっと、手を振っていた。…本当に、彼女と会えて、すく幸運だつたんだな…としみじみ思う。

森をずっと進み続ければ、やがて木々の量も少なくなってくる。その間に体力のない忌月は何度もバテたりしていたが、とりあえず応援だけして歩かせた。

ウエイブが言っていたのだが、忌月の体力は一般的な女性ほどらしい。それを聞いてさらに泣きそうな顔になり、「一般的は一般的でも、体力の無い部類の一般的じゃ」、とさらに追い討ちをかけられ、本気で落ち込んでいた。なんていうか傷口に塩どころかタバascoかけた感じだあは。可哀想過ぎて俺も若干涙目になつた。元はどれだけ体力がなかつたんだよ。

「ギルドに入つたらどうする？ 俺らでパーティー組むか？」

「え、ぱーてい？ …ぱーていぱーてい…パーティーか。組んでくれる？世界違つて一人じゃ心細いし、あんま異世界人だつてこと喋つたらダメって言われたし…」

「ま、気楽に行こうか。まずは慣れといった方が身のためだし」

「うん、わかった。これから頑張ろうか」

「ああ」

「死なないようにね！」

「…笑顔でそんなこと言ひつな、悲しくなる」

そうだよな、死んでこの世界に来たんだよな…。あの時はトラックがすごい勢いで突っ込んできたから怖いと思う暇もなかつたけれど、今となつては思わず震えてしまう。もうあんなのは勘弁してほしい。

歩いていくうちに木々の生い茂つた森を抜け、大きな平原に出た。そしてその道の先に街が見える。あそこがイベリアか。俺と忌月は

顔を見合せた。

さあ行け、とまた足を踏み出した。

「あやあああ
…………」

「ホワイ？ 淑女の悲鳴が？」

俺と忌月同時に足を止める。それから恐るべく声の聞こえる方である左方向を向いた。

「や、そこの人たちいー！ た、助けてーー！」

走ってくるのは、長く、ところどころはねた、銀色のウーブした長めの髪を持ち、蒼色の瞳をした白い肌のいわゆる美のつく少女。うん、ここまではいい。

「…ヒンド、あの女の子の後ろからやってくる大量の犬はなんだらうか」

「モンスターだな」

「物の怪^けですよね、あの犬。…確かに、ぶらつく感じとか書いてあつた。人襲うとかも書いてあつた」

「…んで、あれ襲われてる状態だよな？」

「うん」

森出でいきなり戦闘？ どんな強制イベントだよ。正直言つと戦うというのはあまりしたくない、けれど、…助けないって選択肢は初めからない。
どれだけ今の俺達が通用するかもわからないけど、放つてはおけない。

それは忌月だつて同じようだ。

「おい！ 早くこっち来い！」

- は、はしゃぐ！

黒い犬達が女の子をすごい勢いで追いかける。俺はそんな凶暴な犬達に追いかけられる女の子の方に走る。
武器も何も持っていない俺が特攻してくるのに女の子は大きく眼を見開いた。

「あ、危険です！ 素手で敵つよつた相手じや……。」

「わかつてゐる！ 数があれだけあるの恐えし、まだ俺よく戦い方わかつてねえから戦わない！」

「はい？ どういう意味ですか…？」

俺は女の子のところまで近づくと、そこからぐん、と加速し、女の子の腕を取り、また走りだす。

恩庁に三線でなんとかするよう頼んでみると、すると恩庁は靈體に困った顔をしたが、それでも頷いた。

「は、速い」

「走るのには血身があるんだね！……ああ もつまじひ」

俺は引つ張つて走るのが面倒くさくなり女の子を抱き上げた。走るのがあまり速くなかったので行つたことだつたのだがこれつてセクハラにならない…よな？ 女の子は真つ赤になつてたけど走りすぎて疲れたのだろうか。そう考えると、走りまわさせたあの犬達に怒りがわいてくる。

「忌月…」

「りょーかい！」

戦つつもりはない。勝てるかどうかわからぬし、数がある量だ。魔法が使えるようになつたからといって、威力もいまいちよくわかつていい。もし逆効果になつたら最悪だ。

だから確実な手段。

「【煙玉】…！」

忌月の振上げた手に小さな魔方陣が浮かび、そこに靄がかかつたような球体が出来上がっていく。

前の世界で生きてた頃に使っていたらしい術。…いや今は魔法か。魔力と靈力の使い方が似ていたらしいのでいくつかは出来たと言つていた。その中の一つ。

いくらモンスターだといっても犬型だ。確かブラックドックも、その眼より鼻に依存している。それを利用した術、…じやなくて魔法。

ちなみに出来たと教えてもらつたときの会話。

『エンドー！ 煙玉が出来たんだ！』

『へーよかつたな…、煙でんの？ 消臭効果とかつけれど、部屋

干しは臭いがな…』

『…出来ないこともないけど、なんでエンド洗濯干してるの…？』

あのときの俺グッジョブ。忌月に変な目で見られたけど気にしない。忌月の放つた魔法は俺達とブラックドックの間に落ち、ばふんつという大きな音と共に広がる。

目晦まし用の白い煙がもわあ、と立ち上りブラックドックを覆い隠す。ブラックドックは先ほども述べたように、辺りを把握するため

に眼よりも鼻に依存している。その鼻が使じようもなくなつたら、その動きを止めるようだ。

「忌月！　お前も早く来い！　街の方へ走るぞ！」
「は、走るのっ！？」

忌月が絶望的な声で叫んだが氣にしていられない。俺は女の子を抱えたままイベリアの街に向かつて走った。女の子を落とすといえないので、加速はあまりしない。

忌月の弱々しい声が聞こえたが、氣にせずに走り続けた。

ギルド登録でもました

「あ、あの、ありがとうございましたーーー。」

なんとかブランクドックの群れから逃げて、イベリアの街のその前の道でようやく足を止めることができた。

俺はもともと体力あつたけれど、忌月の様子が誰から見ても可哀想な状態だつたけれど今はスルーしておく。

「わ、私はセフィル・トーリックと申します、ーーーのじ恩は一生忘れません！」

「そんなに重くとらなくていいんだけど…」

「いえっ！ それじゃ私の気がすみません！ なにかお礼できればいいんですけど…」

「あー…なら、イベリアの街のギルドまで案内してくんね？ ギルドに登録したいんだわ俺ら」

「そ、それだけでいいんでしょっか…？」

「十分だから気にすんな。おーい忌月ー、そろそろ行くぞー？」

すっかりバテてしまつている忌月に声をかけると、おおー…、と弱々しい声がする。なんとか立ち上がるも、歩くのがふらふらだった。なあお前の体力本当にいくつなんだよ。

「た、体力回復の魔法なら私使えますよ？」

「体力回復？」

「はい、私治癒魔法が得意で…、かといって効果はあまりないんですけど…」

「まあいいや、かけてやつてくれるか？」

「は、はい！」

セフィルはとたとたと彌円の前に行くと、背中に手を当て、円を開じる。微かに魔力がふわり、と浮かび上がった。

「治癒魔法回復系第十三章【休息なれ】」^{レスナ}

緑色の光がセフィルの手から淡く零れ粒子となつて変換される。時にして数秒。セフィルが手を離す頃には彌円の汗も引いていた。

ちなみに魔法の名前の前に言つていた言葉は詠唱ではない。もう少し力をつければそれも短縮できるのだが、あれは本から得た魔法にありがちなことだった。

詠唱ではないが詠唱と似たような効果もあり、違いもいまいちわからない。けれどウェイブがそう言つていたからそうなんだろう。

「あー…ずいぶん楽になつた…、ありがとー、せ、せふいるぞん」

「？　はい」

「もつと鍛えろよ、さすがに俺も泣けてくるレベルだわ。なんか哀れみ系で」

「エンドー！」

酷いよつ！　と言つてくる彌円の頭をチョップして、なら頑張れ、とだけ言つておく。こいつは優しい奴だし、魔法を使うのも上手かつた。きっと努力もするだらう。

「セフィル、じゃあ行くか？　案内頼んだ」

「わかりました！　ご期待に沿えるよう努力させていただきますー！」

「…そんな真面目腐つた口調やめない？」

とりあえずセフィルを先頭にして、俺達はイベリアの街に入る。そこはすっと昔のヨーロッパのような風景で、思わず目を瞠る。けれどなんとなく思つ。これはまったくの別物なんだなあ、と。しばらく進み続けると市場も見えてきた。美味そうな飯の匂いが鼻をくすぐる、が今は違つ違う、と頭を振つて入れ替える。

「賑やかなんだねー……」

隣で忌月がぼそりと呟いた。

「いいんじゃねえか？ 僕は活氣あるほうが好きだぞっ。」

「まあ楽しそうだよね」

「ふふっ」

そんな当たり障りのない会話を俺達はした。

人々はやはりなんていうかファンタジー。髪の色とか瞳とか。それだけじゃなくまんまと見た目が狼の人とか、猫の人とか、なんかいろいろな人がいて面白い。

なんかいかにも冒険者のように大剣背負つてたり、魔法の際に使うようなごつごつした杖を引つさげてたり、さまざま。柄の悪いような人たちもいたけれど、それはあまり係わり合いにならないでおこう。そういう人もつき物だつてことは理解できるが、進んで交流するほど馬鹿じやない。

「あ、見えてきましたよー。あそこがギルドです」

「へえー…あそこか…」

「私も登録してるんですよ? まあでも、難しいのは無理ですが

…」

見えたのは大きな建物。入り口の横にはギルドの看板が取り付けられている。

冒険者らしき人たちがそこから出たり入ったりしていて、いかにも、だ。

「じゃあ行くか。セフィル、ありがとな」

「いえ！ お役に立てよかったです！ また必要なときがあったらかけつけますので。ではさようなら、エンドさん、キゲツさん！」

「ああ！ つって俺エンドじゃなっ！」

「じゃーねー」

「……この全ての元凶が！！」

「へ、え、なにがだよ？」

「……もういい！ 行くぞ！」

「あ、うん……」

脇に落ちないという顔をした忌用を引っ張つて、ギルドの中に入る。入り口のすぐ横に受付らしきものが見えたので、そこに直行する。

「あーあの、ギルド登録したいんですけど……」

「はい？ 登録でしゅつ、か？」

「……」

「……」

「……」

「噛みました」

「あー、うん」

真面目そうなうえに無表情で言われた。そしてかなりの美人さんだつた。黒髪を高く結い上げていて、きっちとしたボニーテール。緑色の少しつりあがった瞳に、銀色のフレームの眼鏡をかけていて、鋭利そうな雰囲気が伺える。

ギャップと言つ奴か……？ と思案していたら無表情な顔が怪訝そうに歪められた。

「……登録しないのですか？」
「あー登録しますします！ ほりエンド、早く」
「わかつたわかつた……」
「ではまずここの名前を記入してください。それからギルドの利用規約です、契約書にサインを」
「はいはい……」

言われたとおりに書き進める。

「書き終わりましたか？ それでは用紙をこちり。次はこの水晶に血を一滴垂らしていただけますか？」
「うひ、……まあそういうもんだよな」
「どうしたの？」
「いこや……、お前は平氣そうだな」
「はあ？」

一緒に出されたナイフで指を切りつける。いやはや、自分で自分を傷つけるのに結構勇気はいるだろ……。ちなみに彌助は平然とやっていた。ちくしょう。
ぼたり、と血が水晶についた瞬間一瞬だけ光り、血の後は跡形もなく消えていく。

「登録完了しました。あと、これがカードになります」
「はいはい……つて早いんだなー……」
「か、かあど……かあどね。うん」
「……？」
「あー気にしないで。そつこえはお前名前なんていうの？」

「イクシイ・ラメットと申します。他に質問はありませんか？」

「あーないだろ。うん、だいたいはわかるし」

「了解しました」

やはり真面目だ。

依頼と糸田の少年

「…そういえば、貴方たちは一人で依頼などを？」
「ん？ そうだけど？」
「でしたらパーティーとして登録したらどうでしょうか」
「…そのつもりだけ…、登録？」
「ええ、そうしたこちからとしても正直楽ですので」
「…はつきりそんなこと言つんだな…」

無表情でそんなことを言つものだから愛嬌があるのかないのかわからなくなつてくる。美人さんには違いないんだけどさ。

「登録するならパーティー名を決めてください」
「え、名前つけるものなの？」
「そうしないと区別がつかなくなるでしょう。別々に依頼をこなしたとしてもそのパーティーの成果となるのであなた方も都合がいいかと。あとから人を加入させることも可能です」
「うーん、名前か…」

特に俺にはネーミングセンスないし…、忌月になんかいのあるか？ と聞いたらエンドが決めて、と丸投げされた。とりあえず足を踏んどぐ。ふきやつとか悲鳴が聞こえたけど気にしない。
名前…俺達に関係するものとか…、死んで転生して…。

「あ、そうだつ、これでいいか」
「Hンド?」
「▼コンティーニューで登録します！」

「え、？」」「んてぬ？」

「了解しました」

「え？　え？」

どういう意味かわかつていなさそつた忌用を放つておき、俺は手続きをする。

紙にすらすらと文字を書きながら、なんとなく思つけれど、正直、俺は今ワクワクしている。これからこの世界で生きていくことに対して、だ。

もちろん前の世界への恋しさはあるし、家族に会いたい気持ちもそれやある。間違いだか罪に早く気付きたい。

けれど、だからといって、この世界を嫌えるわけじゃないのだ。忌月だってウェイブだって、いい奴がこの世界にいる。まあまだまだなにもわからないような俺だけれど、それでも、精一杯やっていけたらと思うのだ。

今俺らは、壁に貼られた以来の数々眺めていた。いや、主に俺ばかりなのだが、ちなみに今の自分の様子。

「料理料理料理……料理料理料理……」

…おそらく、おそらくだが、今の俺の状態はおそらくたいそう不気味なものなのだろう。引き気味の苦笑の声が忌用からしているし、

自分にも自覚はある。

けれど、だ、考えてもみてほしい。経験のない自分がいきなりモンスター討伐のような依頼が出来るだろ？か。背伸びして無理な依頼をこなすより、こういう身の丈にあつたものを探す方が…、

「本音は？」

「今すぐ料理したい俺の両手が疼く辛抱ならん」

おつと口を滑らせてしまったようだ。いささか厨二病に近い言動もした気がするが気にしたら負けだ。

俺の言葉を聞いて忌月は思いつきり呆れた顔をしたが、特に文句もないようだ。さすがにいきなりモンスター討伐は無理だと忌月自身も思つてはいるようだ。

「んー？ キミら新入りくんか？」

「んあ？」

「へ？」

いきなり声をかけられて、振り向くとそこには青髪に糸目の同じ年くらいの少年がいた。周りのじつじつとした大人の冒険者達と比べると、少し異質のように感じる。けれどよくよく考えれば俺達も似たようなものだし、俺達くらいの歳の人たちも他にもいそうだった。けれどいきなり話しかけてきたことに驚き、俺と忌月は顔を見合わせる。

「…えーと、新入りです、はい。お前は？」
「ボクはロスト。よろしくなあ」

「ん？」

「えーと、俺恥ずつて言こます、ijiajiaはHンダ」

「あ、おー」

「なるほど、キゲツくんにHンダくんな、よひこべ」

「ijiajia、え、えと… わすど、せん」

「発音おかしこよつな…まあええわ、セニブナはこらで?」

俺はHンダじやねえ、と俺おつとも考えた、けれど、その前に…、

「か、関西弁つ!..?」

「かんせつべん?」

「なんやそれ? なんかの弁当か?」

関西弁は日本語じやねえか! なんでそんな風に変換されるんだよ…。いや待て、外国でも地域によってなまりがあるらしいから…、これでもそんなんまりにそ沿つて、俺の知ってる言葉のうちで反映される…とか?

ああもう深く考えるな考えたら負けだ! 異世界なんだからijiajia…

「ああーそういう、そういうえばキミな、わざわざ料理やらなんやら言ってとつたやる、それの依頼受けたいん?」
「あ、ああ…、とりあえず料理したくてたまらない」

「…Hンド…」

「…なんや変わった子やなあ…、くくつ、気にいったわ。料理の依頼なら確かにこらへんに…ほり、あつたで? 上から違うの貼られとつたからなあ。」これ、『料理人募集』の依頼
「お…まじで!…? ありがとうー。恥ず、行くぞ!」
「え、ちょっと、まず受付の人と言わないと…」
「あ、そうだった、言つてくるなー。」

だつと駆けていく俺。そんな俺の後ろで会話が聞こえた。

「Hンドくと面白に子やなかー、君らこいつから一緒になん?」「つこじの間からですよ。俺もHンドのひと、すこじつて思つて、尊敬してゐるんです」

「尊敬?」

「ええ、俺は、わざとHンドみたいになれないですから」

なにやら俺のことを話していくようだが、気にせずに呑付のイクシイに依頼のことを話す。俺のテンションの高さに変な顔をしていたが、事務的に受理をしてくれた。

俺は渡された用紙を持って忌用の元へと向かつ。

「やつてきた! ……けどお前はどうする? 料理したいの俺だけだけど……」

「まあせき合ひつよ。パーティ組んだんだしね」

笑つて言つ忌用。わかつてたけどやつぱりほつこつこ奴だな。

「まあお一人さん頑張つてなあ、ボクはボクのやることがあるから行つてくるわ。Hンドくん、キゲツくん頑張つてな

「はーい」

「…結局俺はHンドなのか…、どんどんHンドが広まつてへのか…」

「どうしたの? Hンド?」

「…わづびうでもこいや、忌用、わざと行へやー! 場所はサー

「食堂だ! ほら早く」

「あ、待つてよー。」

料理、料理料理料理! ! ! なにか作れるのだろうか、料理人募集と言つくらいだ。

俺は胸をワクワクさせながら、忌用を置いていく勢いで走り出した。

依頼と糸田の少年（後書き）

パーティ名決定。
とにかく料理がしたいようです。

頑固親父と料理人

「断る」

店に入り、依頼を見せて数秒。頑固そうないやにたくましい店主に断られました。

「つてはい！？ いきなり断るってどういうことっすか！？」
「どうしたもこづいたもねえよ。こんなガキに包丁なんか持たせられるか」

「なにおう！？ 僕は料理したくてここまで来たんだよ！ それなのに料理の腕も見ずに帰れ？ んなのありかよ！」

「腕？ お前みたいな経験もなさそうなガキに厨房は任せられるか！ 他の奴を呼んで来い！」

この頑固親父、聞く耳持たねえ…。

口調は乱暴な亭主だったが、おやりくこのおっさん自身が作つてあるだろ？このサニー亭の料理は美味そうだ。実際に食べてはいないが、料理の匂いが違う。素材本来の旨みを生かして、余計な調味料を使用していなさそうだ。このおっさんの腕もかなり良いんだろう。

で・も！ それでどうして僕に料理をさせてくれないんだ！ ウェイブのところでの世界の食材についてすごく勉強したさ！ モンスターや魔法のうんぬんかんぬんよりも頭の中にもスムーズに知識として入ってきた。それに忌用やウェイブにも絶賛されているんだ！

「だめなものはだめだ！ サッカと出で行け！」

「見た目で判断するなよ！」

「はんっ！ お前みたいなガキがなにを言つてゐる！」

「さつきからガキガキガキつて……！」

さつきから堂々巡りだ。けれどこのおつせんは本当に頭が固そうだから、もしかしたら無理なのかもしない、と諦めの気持ちが湧く。それに気付き、いけないいけない、とその考えを打ち消した。

「あの……」

「お前みたいな奴に任せられる料理はない！」

「だから実際に見ろつて！」

「見んでも想像つく、……お前見れば新入りの冒険者じゃないか？ つは、こんなことしてる暇があつたらモンスター退治でもしてきたらどうだ？ まさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじやないか？」

「なんだと……つー？」

「あのおつ……」

一瞬頭に血が上りかけたが、忌用の声ではなくと我に返る。親父に怒鳴られてから、忌用はさつきから困ったような顔でおひおひしていつたが、意を決したように大声を上げた。

「なんだあ？」

俺と同じように怒りで我を忘れていたおつせん。忌用にかける声も些か怒氣孕んでいた。

「……亭主さんつて、顔怖いし、背も高いし、声低いし、力も強そう

だし、なんていうか、料理人には見えませんよね…」

「はあ？」

「…なんだと？」

おーおいおい、火に油注いでざつするんだよ、と瓶に油をひたすら前に、おっさんが前に歩み出た。

「俺を馬鹿にしてるのか…？」

「すぐ怒鳴るし、威圧感あるし、料理人っていつも冒険者ですよね…」

「…てめえ

「つまり、貴方は料理人に見えません」

「忌用うつー?」

「…余程俺を馬鹿にしたいようだな…？」

おっさんの顔がまじで怖い。極道のよつな見た目のおえに声も低くその声で怒られるのはまじで怖い。

けれど忌用はおっさんから田を離れて堂々と立っていた。

「あなたが俺達のことを見た目で判断したから、こちらもあなたの対応と同じ返しをしただけですが、それで問題があるところですか？」

ぱちくり、と。俺は一瞬忌用が何言っているのかわからなかつた。馬鹿だからじゃない、びっくりしただけだ。

確かにおっさんは俺のことを見た目だけで料理が出来ないとか厨房に入るなどか、そんなことばかり言つていた。正直俺も良い気分じゃない。けれど、それはおっさんにの方にも確かに言えることだ。

「俺達の歳で経験が浅いと考えるのも本来おかしいはずです。それ

ならあなたは、一度も料理したことがないけれど成人した人になら料理を任せられると？ 廚房に入れられると？ あなたはそう言いたいのですか？」

「んなわけ……」

「なら余計な先入観は取つ払つて考えてください」

「なんだろう、忌月。

俺、料理したいだけなのに、なんでこんな状況なんだろ。忌月の言つていることは正論。これに言い返すことなんてできないだろう。お前口喧嘩強かつたのか、……いや、これは喧嘩じゃないか。お前怒つてないし。

「お願いですから、見た目だけで全てを拒否してしまつよ、視野の狭い人にはならないでください。俺の元いたせか……、国では、主に女性が料理などを行つていて、それが当たり前だといつの間にか俺は思い込んでいたんです。

「でも、エンドは違いました。俺が思い込んでたものを、自分から進んでやつていて、むしろ好きだとさえ言つていたんです。俺のいた国は男尊女卑の風習が強く、女性が行つていた家事を、好きだからやつてている、と知つて俺は驚きました。

「あなたも、料理は好きでしょ？ そのことを、わかつてくれさい」

なんていうか。

なんていうか、俺は忌月の元いた世界のことはまったく知らなかつた。教えてくれなかつたし、あまり言つたそつじやなかつたから、俺も聞かなかつた。

けれどそういう風習があつて、でも、俺のこと改めてくれて。

「なんていうかなあ。

すっげえ嬉しいわ。

「……俺も頭に血が上つていたようだ、すまない」

「え、えあ、はい……」

「謝られたよつー? 忌円すげえ……。このじめばかりはまじで忌円を尊敬したね。」

けれどまだ忌円の顔は曇っていた。そのことに俺が眉を顰めるまえに、忌円の口が開く。

「……先ほどの言葉……」

「……ん?」

「『『』』んなことしてる暇があつたらモンスター退治でもしてきたらどうだ? もさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじゃないか?』……ところづ言葉について、謝罪してください」

「おい、忌円?」

一字一句間違わずに覚えてたのかよ? と、あまり関係ない突っ込みを脳内で繰り出す。

「……これはHンドのことじゃなく、あなた自身の仕事のことに関して、侮辱してこます。人を蔑んで、そのうえ自分の仕事を馬鹿にしてるんですよ? いくら頭に血が昇つて言つた言葉だとしても、それはあなたにとつて許せる言葉ですか?」

ここに気付いた。多分、この言葉に関してだけ、だけど、恐らく俺に向かつて言われた、このおつさんにとってまったく関係ない暴言。

「理不尽な言葉。」

これに対し、忌円は少し、怒っている。

「……Hンドはモンスター退治に怯える臆病者じゃない。」

謝罪、

してください。

頑固親父と料理人（後書き）

忌月くん怒りました。怒ると怖いんです、多分。
多分エンドくんぽかーん状態です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Rollとコンティニュー

2011年12月25日21時53分発行